

# 音 合 町 崎 黒

## 新聞からたどる黒崎の歴史 (五十六)

### 双葉山、羽黒山から大相撲大野巡業まで

昭和十六年六月、双葉山、羽黒山の相撲一行が西蒲松長村で興業を行つた。

(先月号からの続き)  
昭和二十一年八月十四日記事  
読経怠らぬ生活、愛妻子  
煩惱の羽黒関

新潟人の横綱羽黒山を十四日朝、相撲場の傍に造られた天幕張りの力士控室を訪ねて、相撲道の将来を聞いてみた。「結局相撲道を興隆させるには、一にも二にもこれに携わるものの精進如何ということになる。土俵で若い者に稽古をつけて今戻ってきたばかりだといふ横綱は、寡黙にこうばかりと言ひ切つた。「日本に特有の運動として残っているのは殆ど相撲だけだが、これを青少年に普及させて健全な日本建設の一助としたい」。焼けなかつた郷土を見るのは懐かしう、今度も白根から出身地西蒲松長村字羽黒へ暮参りに帰る予定だといふ。なお立浪部屋山田康延氏は、羽黒山最近の風貌を次のように語っている。

三月二十三日山口県に巡業中奥さんが急死し、その涙も乾かぬうちに今度は三つになる坊やが死んだ。現在は江戸川区で義父母の立浪親方夫婦と、六歳の娘さんと一緒に暮らしている。愛妻家で子煩惱の同関取のことゆゑ精神的な打撃は大きかつただろうが、「自分は相撲道の興隆に一身をかけているのだから」と、大阪、京都場所も休まず、奥さんの四十九日を■のうちにすませたその足で大阪へ乗り込んだ。同関取は大体寡黙で敬虔の念の厚い人だが奥さん坊やをなくしてから更に信仰心が深くなり読経三昧の生活を送っている……。

※注 ■は判読不明文字

#### 羽黒山の人となり

これは、横綱羽黒山の人柄についての記である。羽黒山は前記の如く、西蒲原郡松長村字羽黒(現在の中之口村)の出身であり、昭和九年五月立浪部屋に双葉山の弟子として入門した。これは、立浪部屋の山田康延さんが、羽黒山の人となりについて語つたものである。古今東西を通じ、名力士と言われた

人たちは皆家庭を大切に、愛妻家子煩惱の人が多い。近年に至つてあの名横綱千代ノ富士の子煩惱ぶり、若貴兄弟の愛妻家子煩惱も有名である。特に千代ノ富士は、場所中にも愛する子供を亡くしながら、悲嘆の底から起ち上がり、優勝を果した精神力と、その手にはいつも数珠がかけられていたことを思い出す。

寡黙で稽古熱心な羽黒関もまた愛妻子煩惱で知られた人だったが、関取にとつてこの二十一年は誠に悲運の年であつた。三月の山口県巡業中に奥さんを亡くし、その涙の乾かぬうちに今度は三つになる坊やを亡くしたのである。あの一人倍子煩惱で愛妻家だつた関取にとつて、どんなに切なく苦しい年だつたことだろうか。そんな中も「自分は相撲道の興隆に一身をかけているのだから」と、ほとんど休まず大阪、京都場所へと乗り込んだ。家にある時も、場所中の旅館でも暇さえあれば読経三昧の日を送つていたといふ。

こんなに心根の優しい羽黒関をだました新潟のあの詐欺師、今生きていれば筆者より四、五歳は上のはず、どんな気持ちで

この記事を読むのだろうか。筆者は昭和二十年代のころ、巡業に來た羽黒山を新潟(自見)行つた覚えがあるが、実に堂々たる名横綱ぶりであつた。

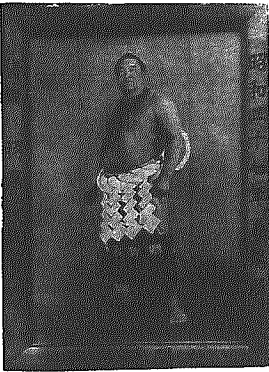
#### 故郷での土俵入り

横綱に栄進した昭和十六年六月中旬、双葉山、羽黒山の立浪一門を主体とした大相撲一行が、羽黒山の郷里である西蒲原郡松長村大字羽黒で興業することになった。この計画の発想は、羽黒山が横綱に推挙された時に羽黒山の脳裏に浮かんだことでもあろうし、またそれは何年かの村民の熱望でもあつた。しかし、当時の松長村は戸数三百戸そこそこの小村で、羽黒山の生まれ育つた羽黒部落は戸数五十戸位の部落だつた。この小村、部落に立浪親方、立行司木村庄之助、双葉山、羽黒山の両横綱と新大関興國を加えた一行二百数十名を招いての大興業は、とてもそろばんずくでは考えられないことであつた。羽黒山の出世を我が事のように喜んでくれる村民の為に羽黒山はこの記念興業を決意したのである。部落民も一丸となつてこれに協力することに、興業は八月十三日に決まり、会場は松長東国民学校(旧中之口南小学校、羽黒山の母校)のグラウンドを当てることになった。八月十二日の午後四時過ぎ、関取衆はタクシィで、幕下以下の力士はトラックに分乗して部落に到着した。力士や行司から呼び出し小方まで、二百数十名の大部隊で、その宿泊所の割り当てが大変だつたらしい。あらかじめ、大きな

家、立派な家には、関取衆やお偉方が、小さな家には幕下や小方が泊まり、力士を泊める家の人達もこれに協力して、力士の名を書いた小旗を持って出迎えたといふことである。当時はどこの家にも今のような浴室がなく、ほとんどの家が外風呂で、周りをよしよしで囲んだだけの所が多かつた。若い力士達が学校で学校の近くを流れる用水掘で水を始めたなら、子供や大人までが珍しがつて黒山のような人だかりになつた。

八月十三日は、羽黒山を祝うかのように素晴らしい日本晴だつた。未明の午前三時頃からやぐら太鼓の音が流れてくると、泊まり込みで来ていた近郷、近所のお客や村の人が夜明け前から詰めかけていた。朝稽古の後一行が東西に別れて取組が進み、中入り後、両横綱による土俵入りが行われた。華麗な双葉山の土俵入りに対し、羽黒山は太刀持ちに兄弟子名寄岩、露払いに旭川を従え、勇壮豪快な「不知火型」の土俵入りを披露した。土俵入りが終わつて羽黒山は、「私の今日あるは、ひとえに故郷の皆様のおかげで賜であります」と礼を述べると、会場を埋めつくした観衆は一同となつて羽黒山の誠意に応えて拍手を送つた。取組も順調に進み、結びの一番は双葉山対羽黒山両横綱の相撲である。羽黒山は堂々と双葉山を寄り切り、晴天に恵まれ、歓声のうちにめでたく千秋楽となつた。

(続く)  
※参考 大剛横綱羽黒山記念誌



羽黒山の人となり